辭と玉の緒

815.7
M893k2
m

國立國會圖書館藏書

や

○やの結びとは。紐後の中の切り乃結びとは結びて一の玉に出きる三結法言乃おなじ。ぞのやの字ハ結びの辭日じきゆふやの字を結びの辭ともなるなるべしとて。別なるハおれかゝぞ

○勅のぬきをして結ぶや

古一　しるふ所ゝとこるこゝろ結ぶこゝろ結ぶ結ぶや　ものゝ川

後拾遺　いつとなくこゝろ定まるとがごひや　ふじ結ぶ松ふかく深ふを

千四　てる月ハきびゝ孫の床や　志すとゆふかづきひのたふ川の

新九　こゝとや　きは雪結ぶとふあるとき〳〵たつてゝ玉乃玉数

万一　こゝとや　ものやまゆふてハとがこゝろきぢふをふ名ふをふせのひ

國立國會圖書館
1240.5
25367

月十六　ゆきと[や]このゑふもふ門のうづゝもふ藤うるそふあゆをとめごと

いせ物語　こゝと[や]この王のそごろを[illegible]こべゝとを[illegible]ゑがみきゝとたてまつりけると

又

金四　ゆく川者八吉野杉葉ゆく[illegible]ゆくとこと[や]小雪山の雪ゆきびゝ

ぬれ衣集　みそもとりうりけるを乃ちゝびのゝ[illegible]ゆきせぬ和[や]ゆうが身のこゝさ

こゝゝハそのゝびゝさまろがこゝをるどハ親く用の言ゝを神ゝ各脇の浦

よりひゝて結びゝゝゝりのゝゝり

新一九　いとぐ川そゝ[や]きぐ紅ふ秋の葉ゝ下はいゝゝもふ松のゆふこゝ葉

葉ハやのゝふをゝく紙ゝいふゝとハゝくゝてゝ葉ゝまゝでハかゝら流神ゝをその紙をやが

て下へも刺むて紙の葉ゝとゝでゝきゝゝゝゝゝされゝ上旨のゝとハいゝゝゝ立やゝゝきゝ

よ秋ゝゝん秋の葉ゝのゝゝゝるゝといふゝゝゝゝ山ゝのゝゝ三のゝゝのゝのゝゝゝとハゝ

ゝゝ

ごゝ月　たゝひゝよりふべ乃ゝをゝたをゝゝらばゝこゝと[や]数きふたへゝゝゝゝゝ

月八　ゝゝゝゝゝ

同云　かくれき秋のうくん　や　るつくい　数あへぬ数ふうりとふくし

同十　みやこうとも　や　さろとをうつの山　夕若をくふたこの下き

同十一　うつきみれなく　孫　や　よそふありれ　孫　ほしにへぬ雑を人のそうこと

拾十九　ひふこしよくて　や　つひふやこの秋の思ひもいそぬ人ひとめうは

ふあハやこなんとふこふふいひけこそこの雲れ秋こそ切とをしたものとなして

下へできしこふハあべての橋と異しぞの紙のひひをかも式橋あり

○切くや　□　後のこぐ見ふかくや　□　やう

古十二　書こふる春ぞなく野るをこみべしかのがもし生のもしこそだ　や

後四　数あくぬとがこ山べ乃はこぎを本紫ゐ山れ参ハきこ四　や

後拾十　とひでやくれひやふぐふ春をいふぞ君が袖をくちぬ　や

同十六　うかりきくみのよの浦乃うつせ貝ひをしにれのこうつハきて紀　や

同十七　あ　北本はくそなぐくこそ恋ふりとりふのあそ布むひのひでと　や

同十六　こくくもおりそぬハを紀ふ山ぐき沢ゆくをといくぐきりふこんと　や

新古十　雑段ぐくみぐくれ芦の物しれきとなでで山在をくてくよと　や

いせ集

同十九　おりひいげ　や　みのくを山のむこう松難ひくくハいつと言ぐ沢

同一　ちる花をのこをもくくんぐ　や　いそのくぬりこうとをくむんを

新十　袖ふくを用うきくは難をおうぐ後ちる　や　くれのふごえ

後十六　裏の地くくこふりくむくいふくうハふくりぬぐうえでこり　や　こ

新十三　きくく　や　いうふくこのそくこ地ぐふをまつふ春ちるなくうひあのくと

ふきくやいふハぬくやくれ京ぐくつ山橋と八異くくてきくやくくく

後十六
ゆき来

後拾遺
二六

後衣

後の心用例えはいとおぼせみぐるとりてはりそうるかしこん。や

ちらせ雪より後をぬ雪ふるもおくしん。や 雪あるゆる雪ふ雪しそれぞ

なのごとくんやといふて文をおくりてきまいてきまんと

又

かしこまれ月の下雪くるとぞふるあれぬめと。や りるをうるく

たふ潮 ふるはうは雪ふるうるうきえねと。や 立ふるを昭ぬいるとを

あふ坂をあかゆきうりまぐく。や 雪のぞぐしとかとうるくに

件のあぐとのぐくなるぞうるそやくはるうるはまれし。なるばうはるうるやはあるくはは

切はさるやあり○又あるやとはいひて切るるとと。又あるれた。雪のはえはるくしぐ。

後後撰八をきふとはふぞりうるや 雪ありるさはあるのうりまるうるぐぱふやはは切は

ぞるやうちれれやくはひそつとはぐ格をれはいぐぐるるはるはきぬとはふぞう

雪あやくしのくるくのあるとあるれはは結をふりまるるるんくをてこ

こうるるへふ。ふらんくはるやくはるとはぐとはるぞ。つくはるぞからるくりまん○又れたて

古歌のふをるるくひそるるやは月の有はるくりるるるぞ。風雅はれるきるくんのまぞるむ後

そそや思ぐるくるはにきそそるぐくるるやくはひて切るるる。切てはいるぐふ

きるえ。切はるれはやの結びくるぞりるふかくにはるくるるきるくぞ

あるイトを結ひのやふ。後のあるぐ水かきてトをその結び辞をそ結ぶと。後

のぐぐはふ。切て切るるの二つをておのく上より矢る言は格をし定まる

わり。あるぐふかくやの上をかるくはぐく格の辞をあるけそぐはふふ

おきて切るやの上は。岩切るくはぐく格の辞よりあるが定まりし。はぐく格の辞とは。

あり。切るく格乃辞とは。右はの結びの結びの結び 紐後の中の切の結び

一の表のるるにくるくいてるぐぐ さてなかぐにおくやの上はぐく辞

るるるるはは。たるくたはもおのづくはるくはをきあるを。そぐめおお

きて切るやの上を岩切るく辞よりあるるはは。人えおのづくるくこ

きまて。一つとは結るるるりしを。後世の人るるるはれはこと成結て。

後ぐく格の辞よりあるるくおかしく。その例を一つ二つ出てそれまく人いて

ぢ。ありやゐ〜やといふが定まりて。あるやゐきやとハいそぢ。
当後の右ばりて。ゐ〜ばり。あるきハ中。そ。そ。ぐ。縛し。
つきんもつるやとそるあづえのまゐふわんこと。ぐ〜し。ゐつるやとそ〜ぐ〜ゐべき
格し風雑なること。
ひあやまりなり　又ありきやゐ。ありきやゐ〜やに。きや〜いふが定まりふて。
ゐつ〜やゐつ〜やゐぐ〜ハいそぢ。又えぢやきりぢやゐぐやにぢや
くいふがさぐまりて。えんぬやきうぬやゐぐ〜ハいそぢ又えんぬや。ゐ面やゐ〜
いふが定まりて。えゐやゐすゐるやゐぐ〜ハいそぢ。ないづもゐ。ゐ。後の右ばと中ばとを以
てゐきまゐ。ゐべ〜ゐ。ゐべ〜ゐ。ゐかぢめに。ゐて。ばるやの上ゐみゐんの格〜んばぢ〜。
ゐて又位のゐぐぢにゐくやの上ゐつるやゐ〜きゐきやうゐ〜きゐ〜やう
ゐづく時。ようゐるうゐ。ゐ。ゐとこゐふゐぐ〜へてんばべ〜。ことハやゐ
むいづものゐふゐ。ゐ。ゐ。

○やをさるのる掛くさぐ〜

古一　ものしらぬふるまひをこそ一とせをこそ〜やいとんこうとやいとん

同十四　美あいふるまひのかく〜後ゆくは、あやいを掛ぬ人やとそ

新八　うとしとがり苦はたらぬ所かうやうこうしよや美

俳諧名寄　あらはをといふをりてらなぐさをんのるやあきやあきやうあき

古三　秋やくさきそやまぢる　そくきをあやどをもるがてふなく

同十三　名やうるれやけきんたとかしを美くうつう掛てう出をてう

同十四　月やひかしぬをやしらはををかんぬ、美名をかんの名すて

風俗文選　雲やかをくやうぢりはしこれぬふしおうをはふやうをうを掛

古八　えびをうしぬかしこうをえよ命ひかしば美やとうく人やとそぬく

同一　名やとをきあやをきとをきくこかん美しかやもるぬをうを

後十三　ちどやあんきやせんとの〜川岩はまりの心をおりひやらをん

古十四　名やこんをやゆうんのいさしひかを高はは板戸もうびを掛かを

　　ちのちはいるなるばかあくやのをまをまるし

　　又切くやのをまをまるし

新十七　ちの川かくりふくきくうをちをくうん和紫はは掛をちるやちらびや

千十四　ほすとぬ（ほねし）やちのぶやいいぬまはは船ちとはあをびをのを

新十三　夕暮くう金かけるうぢうふのあるやひかびやいうそふもくかや

千十二　ぬの名とやいあとやいいいかをいいはを船乃高ぢくと掛くはもへふりを

古九　名あ〜おちでいざちくうんみやこをるとがうふ人をひりやをやど

又

百四　かくして　や　あれや　や　まかるん　近くねるこのあひだをあづきまぬきて

同七　くして　や　あれや　や　者、あんみ、者物る太荒木世ちうなるくゆ

くきしハあうぞにおくやるが。きもしざあよのつもくかうりて。二つのやをくきて。一つの

結びしうぢちくきよりこうきくるハ此橋をー　又

千十七　こまこ　や　ゆえん　いづまこうう　て　をう形ちに見ひとうぞをもるぬべきう邪

あるハやしかとを主ひうりをぞし

○や　何と法ぐく場

後十三　あふまこどゆしねどぬくく家神乃かく除見ひかかとうぬ　や　あぞ

同十九　元城のこ西ぶの里へゆくりけを舎津の山ちるき　や　あぞ

拾古　おりちけてづうきくに苦ちく人乃こひきや　あぞ

新四　歌が蓋主神ちかまて主る法れ尾上乃主ふをぬる　や　たき

拾遺秋　信ちぐ姫ふ世てれり和の帆りぞふえゆるかぐうり　や　たき

古一　きぐすをたてる　や　いづこ　みよ　世ち苦世の山ふ雪をぬりつ

同十七　ぬー　や　ゆき　ちへどちくむいをくにけくハあべてやのかれしをん

同　むぐゆきちおぐを　や　いづ　こちろぎの磯乃法ゆかきふ出ふ見

玉三　主夢　高わをん船ちあるけを主ぐでみやこ　や　いくう　まうや系

まる

後三　うちをくて主ハさぐかりのどをき代花のうろう　や　あふいそぐらん

同　高ぐふをなるうる法言ち菓ちバ主のあるぐ　や　いくよあるうん

後拾九　たぐつうるみやこの主　や　いうるうん　ちよひあるうちに月をうるる

新十三　おきそうる高　や　いうる　高ちうん今ハきえもくふこ高月を

又

拾門 みるかつふかろもろけぢを出代乃松や□□結びかさきん□

ことハかをそをそうり先づ

又

孫きあきま うり門垂れいのるや□あふのしま向していそぐ生田のりうれしゆふ

ことハ八のつやあふのたむをぞとかつきまるをやぞ下へつぐそうりめづし

ます

後二十 恵ぐつふーかつやいづこぞ□きつをきのぬーあき宗しんそうあき

新十一 世歌 みつをかるかつやいづくぞ□をさして西ふきつへよこのあれつり私

新拾遺集 ゆきやしねろろやあめぞ□私のせれそハあをもいしとふを

ちをつハぞをあつ

又

後十一 なるぐ門おかを藤をとけるものをちしふハりの家や□なふをと

□□

○などや あぞや

風十 陸信新集 うをぐはをつべかやあるまち風れたがゆくへうしもぞや□ふきこぬ

千十二 など□や□かつをしもるがうれたちえ花わがま門ことハをしをうぞや

六拾 おいぬをてなど□や□ゆををせをぎをんおいぞハうゆふつハまつ祇の

後十 たつををあぞ□やこあふのをつをつかんを月かつをんを月あやしへをかつをん

新十七 夢はをあは□あぞ□やうへあれしゆあづをのあうねるをを川つをみゆバ

拾八 後撰集 ちををを

後拾十一 源俊頼

なぞや

山ぶみハなぞやうそ切しとハ侍ゝそハてふをそのゝ

大うゝ何名ぞ下ハこゝろ。かゝる例まうふ。たのゝ〳〵などゝゝるぞゝの

二つのゝ。やゝある例ありその本にまどハかゝゝあるゝゝるゝゝて。やゝ

あゝるハつゝもゝ。なぞハやゝ。ある例のゝゝそ。かゝるゝゝを。

○あふをこやいくるまやなどハ別ふ下のまやの條ゝ出せり

やゝ

やゝはゝのや

古八 うゝしゝに花まちゝるふ有し葉うつろふ秋ふかんゝと や えゝ

同十 秋乃田ゝ刈のゝ〳〵をゝゝいをつる秋光のまふゝとゝる や ゝすゝ

同十一 ゝゝをそゝりあき拙ゝおりしぬゝゝゝ や えゝかゝべき

後八 りみゝ紫を時雨も洗ゝしまゝ紅ゆきて ゆゝん人をふり や ゝゝでぬ。

同十 雞鳴ゝかりつゝ夢の行ゝで秋ゝ〳〵もゝをゝゝと や へゝつ。

古一 えてのゝ や 人ゝりかゝゝん。ゝゝばゝゝゝゝゝゝゝふて逢ゝゝふせん

右ゝゝみるなかぞふおゝ や し

山下ハゝゝるゝゝゝゝ や り

古一 ゝふゝゝゝゝば 時月八者ゝゝぞ ゆりゝまゝゝゝゝゝゝゝゝ や

同十六 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝふゝゝ紅葉ゝゝゝゝゝゝゝ や

後拾古 ちゝぎゝゝばゝゝ飛人のゝゝゝ や 橋の行ゝハ侍ゝゝゝゝゝゝ

後拾三 小倉進 きゝゝ や ゝゝぎゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

八　儀茅ヶ崎そうれくおきし　茅ヶ崎上の海を眺見て。たりひりをきや

第四　衣の部　いか〜へそおりひりけきや　そろとかり〜ぬ〜きんぬと。の白ヶ崎衣を

拾三　かりかふ〜そ〜くべり〜ぬと　や　秋の色ヶ崎ふる極り日と書ぬべ〜

拾古　ちぎりきや　あねヨクれよ　高ふき〜ひろつきがりかくこんをまと。ハ

古十八　おりひきや　紀ヶ崎ヶ崎と崎とにおろへ〜海士の縄〜ひいそりせんと。ハ

廿十　おりひきや　垂ヶ崎ぬ〜こ代りいんよりとかぞふぞりにおそんものと。ハ

古十八　ちぎりとて　八茅ヶ崎ぞ思おりひきや　雪を崎〜ふて恋とこんと。ハ

廿二　春ヶ崎衣乃美のうちふとおりひきや　恋をき宿をゆきてこんと。ハ

まべて思ひきやのやハ笠やそれのことじさて思ひきやしいへそかろ〜ばそはこ弦

ぶかハなきうすしと思ひきかくく〜そ〜ひろのくもむきでり

第四　衣の部　おりひきや　ふぢのころをほどとなく崎ふまて滅かきんと。

廿三　こをハ〜でとと思ひ考こり

又思を上ヶ〜ありをとなる

千十五　をちこちの人をえまれかる山里ヶ〜恋ヶ崎せんとハおりひきや　恋

うれ人を思ふべ〜とハたりひきや　とぶちろさへ恋とかちろ〜ん

又上ヨとのくおりもあり

廿四　手たをて又ちべ〜くおりひきや　命をりろと佐東の中山

又上ヨりいひてトかと又思ひそ〜ふてこと。こをハいりぬぞや　雪

廿五　かけてぐふとが考ひうへ。思ひきや　ろん手まの花をえんとと。ハ

まべ〜思ひきやハ〜ヶ方をいひ。きハ〜ろそ思ハ〜をよハ今のこをいひ

でちこと思ふ〜代。一つこと思ひ形〜人をかりハ温し。末の撫まの中にも。思

ひきやしくあらべきかを。思ハとよくよあるこをかりこぞそ。ぬをぬぞきすし。

○やえ

古一　春は東乃やまハ万やえしらめけ雲ゑてしやえて桜ゑ　やえかくて。

同二　吹風をなきてうゝ舟よゝうぐひすハ花　やえ　花ゑ山じゝふ雪とゝる。

同八　りろうとゝ水ゆでちゞ色よきりぐを秋のおきハ惜く　やえ　万ゝる。

同十六　かゝ万ろうとなを山バ万にてそまつをめかをてのを　やえ　ゑんゝ見ゆ。

同十八　野ゝゝゝ

円四　世へ〜やた　長ひかりそこといくせんむぐらの宿の秋乃ゆふぐれ

武蔵のやたハ見づ〜しきつひぢ山へでくせうまどの。法ぐきてハてふをそそのをんぐ。加ぢてきをふるあるやたを。

千古　人ぢてハそ〜も　やた　ふ〜ん人せぢや　ふ〜ふなるまてすぐるを

こまハやたし〜切まてるをこと〜ことてでけ〜ふり。後後ぢきさせ好ふおとバいふふ

ふとバ見ぢ安中に永劫部ハ長ぢ八ぢ。ぢびぬやた。ぢ。やたふんねと。歌島のやまそを

ぢふる見や。こよとてふ。まふ〜きそふ。

又一橋

古一　ぢふ〜ぢ長ぢくけ当てるそ〜ぢふと人のふ〜ふ行ふれ　やた　せぬ。

円二　ぢふ〜ぢん新ぢも先ぢ山ぢこを不ふ明ぢをふてへ　やた　せぬ。

新十六　ぢりひやふ〜ふ昔ぢそに当〜ぢふ出〜ふ方をふてせ　やた　せぬ。

いせ来　秋のぢふり出ぬ〜きぢ〜武蔵ぢ〜き見びふ永をまのき　やた　せぬ。

秋氏　安ぢて　うちつをふ日加ぢをふ〜ぢ世加ぢでそ見ふん方ふ〜ふひ　やた　せぬ。

円　若のうち　永宿ふ若乃いろこきたそうれふ春の　やた　せぬ。まふ春ごろ武

後十一　道ふ〜ぢやこ　やた　ぢ〜ぢぬ。色坂乃笑ふあるふ〜ふ〜みぢ〜ぢ〜ぢし

件のこのぢとのやれハ一つの横ふそ。ぢまの峯ぢんぢ〜ぢ見ぢ〜ぢし。ふ〜ふのふりまやそせ

ぬハ。ぢのふそ〜ぢふれぬふぢ。ぢふ〜ふよかし〜ふ〜ふまふ。ふ〜ふ〜ふやれ。ぢふそ〜ふ〜ふ〜ふ〜ぬふ〜

ぢ〜ふ〜ふよかし〜ふ〜ふまふ。ふ〜ふ〜ふ〜

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

月十四　みすゝきたかのの色はあをうみめとみふおりとゞとがうひ　めやと

後十二　ゆふそへうりうまどゝ　めやと　しゝへどもしゝへぬる人のこゝろありきと

古　雲威　山しなの乃きねの雪ゆのきうりだみ人乃きうゝとがあひ　めやと

後拾十二　定家卿　あゞ波乃うゝ所のたゝ波をあまとねきと波だかけてわがこうひ　めやと

歌一　やうたうゝ雪柳　めやと　うげうゝ山はるゝ日とゝ波うゝ山のを

めやとハ夢路ゝいとたゝ　めやとゝ　ゆうとして柴うゝ山めやとゝいつゝを

おゝんれもまし

古十二　はのゑはなゝ所のゝ山ゝ比光とゝふゝがきとが春人きゝふ　らめや

後十八　あゝ引乃山下ゝうみをくゝうをゝ　とがやとゝゝえどねかりゝ山　らめや

後拾十二　きゝう　らめや　君ゝや人ゝ春をゝ　ゝうゝ波ゝ所ゝ比ゝ　ゝぶりゝ乃ゝと

らゝやハらんやゝのゝとゝり

（工）

○まや　みゝを

古四　秋の野ゝにあゝくゝきゝゝ嶋ハゝ春ゝ　まや　ゝゝゝぬきゝうゝ物乃いゝとゝぢ

月　里ハあゝそゝ人ゝを春りゝにゝ　まや　ゝゝゝ春をもまゝ紅も秋のゝゝゝ

月十　くゝべきやどゝ所ゝとゝぎゝ　まや　ゝゝゝ春りびて明ゝ春ゝ人をゝよゝ

月十一　いせの海ゝ海ゝとゝ海人のゝゝ　まや　ん和ゝんを定ゝかゝつゝ

月　ゝ紅葉乃ゝゝをゝぎゝ湖ゝ　まや　海きゝゝを春ゝ人乃春き

月十二　とゝがゝをゝみゝがゝとゝ　まや　ゝゝがゝまゝゝれゝゝ春ゝ人のゝき

月十六　ゝ海の山のまゝ塩やき衣のゝをゝ　まや　ゝゝがゝきゝゝさぬ

月十七　嵯ゝを色ゝ時ゝ春ゝゝ　まや　ゝゝのゝゝ春ゝ

月十八　ゝゝゝ春ゝ月のゝ紅葉のゝ紅ゝ　まや　海を濃てこぬ

辰五　紅ぐゝしき山のちるを［きや］ちつるなへ水入日ちるゝん

月八　天の川　夜はこゝろ月そらゝぬ［きや］　岩ろにゝぎろまじぶとせぬ

月廿七　ちゝ雲のきやゝる岩はちかまゝ水枝ちげ［きや］日は光えぬ

千十一　あぢつりるゝ海のしぬはち人な［きや］　日がこの紫波ちゝぐぐかある

右の上やハ岩もとをふやしらぶゝとし。弟ゝにこのれを暴きてきやといつる例も。弟雲つよ水のをきを。又そのをきをと暴きてきやゝといつる例と。弟系ハかにもつよにあり。ゆきだやをゆきやゝいひ。ゆきやゝいひ。ゆきやを忘へやゝといつるもひもし。さて此きやハ詰切きぞ下へつきて。そゞぞえハ岩やの詰びゝり。

右十九　岩ゝれを生べふまづゝ　ゝんきどあゝんぬちゝ。ゝんぬ色ふ白なのゝぐぎ岩のれな［きや］

月十一　ゝゝ日ゝしゝゝしゝゝしちゝ白ちゝんゝのな［きや］　ゆゝてもたゝゝゝちゝる下ゝゝと

添民　さゝゝゝ　ゝゝやゝゝゝゝ海ちのちゝゝしにあゝゝな［きや］　ゝゝゝゝる風ふゝゝゝゝ日ゝ神

右の上やハ岩ゝゝやゝゝといつるきゝやハ岩のゝゝりやゝ岩ちゝのゝべきゝんの

ゝゝハ白ゝゝゝゝ

日

ひのはふど 世しを ほ見が 雲を [きや] りぞりも 波もたゝぬ日ぞあき

千雪

ほしゝえて よ紙のゞるべき みちを [きや] 出さへ 苔ぬ 夜きゝ ゝる

勢ず

あきぶ人 ちゐ ぎきやる 計 雲を [きや] こて 月の 未 ぬ ちゝを

日十八

やゝゝぞる ぬりに あまる 新を [きや] いちど 川 水の 秋 乃 ゝの 月

勢勢一

花を [きや] 山の ゝ 花 紅ぞゝ あ ゝ ふ ゝ る 雲の おゝも

蓋万下

ゝが 月を ば ぬゝ 柄 あ ぬ ゝ と [きや] ちど 流 ゝ る ゝ ゝ ひ ゝ

六北

ゝぞ人の ゝ ゝ ゝ ゝ 秋 な [きや] ゝ ゝ ふ の ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

右の [きや] ハ ゝ [きや] と 紅 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

同十七　ちりげのをまぬ方〜後〜そいかの　きや　をーまれていと月もあるようふ

右の歌やハ。上の伝をしらぬ同者て。やうそ切とし。なう下人何やの結びうり
かりつうぼ。さて此句ぞ書れやハ。ふるうぞ。ハ。ふるうぞ。ハ。ハいろ。ぞ。ハいろ。ぞ。ハいろ。ぞ。

たゆとそ。ふ。ぞ。ハ。ぞ。ハ。ぞ。ハ

千載集 公ごろもの本紫がゝ結うりもとのこゝろもとで やらん おくづもせぬ。

天平 嘉祥 ものみてゝ 姫ごろもふりけゝゆゝ志づのゝぶを やらん 拍あり。

をべてやらんしらすいやしき縁にて。ふゝと文ふとふゝ八そし。今の世の人ときまるに何しも小ふる心むづかしたのふ書面の書の書もむぎにを

とゝしゝ雅ぜゝまてり。

ちゞ見よりとこまでの傳ゝハみる歌ひ乃やう

○ 歎息のや

なげきゝハ。後世ハとゝらわひうまむうれのゝいゆあとで。

そふわゝしゝ。うめゝきふをありゝろきふもたりまるゝふもわ

ゝうそまゝとゝ仏ゝ係ゝ感せゝ思ゝ的ふ。ゝ息をはゝくゝうしゝさて武やゝ。

その歎息の声ゝうゝふ今かりに歎息のやゝらひてるをとかてり。

古士 何しかもしたゝうゝ八へ何乃ゝゝ後の志しまで や 人をかゝらひ人ゝハ

日十九 思へゝもおりそゝくのゝいふまハいな や 思ゝゝ れりふゝひゝ

後人 よの中はいふふ や いふ仏の吉城きゝ歎ゝ八物やかゝ

拾云 ゝ むゝもかゝ や ゝとゝれ 仏たゝ形ゝぐをゝふゝ。えやハゝで むる

後拾十六 孫なゝはの孫ぬ孫ぬいゝゝ立ぬまゝであれ大海のいゝゝ や ようふ

金八 ゝゝゝゝゝ師の後乃ゝ後ゝ乃ゝ後ゝ乃ゝ や 神のぬまゝゝもゝれ

新二 ゝゝみゝと や ゝきゝ成むのいゝひ一ゝゝゝ風乃ゝゝとゝひ乃ゝゝきバ

日三 きゝゝゝ 孫なゝ ゝ孫を日ゝゝきゝ 井ゝゝゝ や よゝハ乃一新

日八 何つまゝゝ わゝが身ゝゝゝて や 後みゝゝつひゝハ思べの震ゝゝゝ

日十 人をなやゝゝみつべ や 新ゝ乃ゝやゝゝゝふゝゝふをきゝゝバ

古九 かひが相を孫ゝ ゝ ゝ 吹風を人ふをがと や ゝゝつてゝん

万五　ゆるぶやをふもげも[や]みやこまでおりきをてらむるつるめ

金七　ゆうまもとのゐをこしはらりかへをあをもげ[や]人をうゑみど

狂歌　あをうりもろ海士をもげ[や]ともつ海の波乃玉藻もかづきこるべく

後十五　ちう川のゐるたのいとゐんまわ〜ゐれどみぐりに人をよせど袖を[や]

件のゐるのやうな歌息はやうてこまに隆きてもをこハ月ど〜

ゐれた。ゐ月〜ゐてその時源くゐるし。或々よ或ハゐをゐふ無ひ。又

[　]ゐ〜いふこふも無一り太の外ちゐ二ゐきや。月三や[　]よやまて。後

拾三いそげやさゐへ。河ゐ三ゐ[　]や社風ゐどのや。又ゐでやいゐやや

よ〜やのおゐ又ゐう社〜や[　]ゐ〜ゐりやゐ[　]ひゐ〜やゐくきゐや[　]ゐ

ゐ〜ゐりゐ社〜やゐ[　]ゐ〜ゐやゐ〜ゐやゐどゐ社のやもみゐは〜。

万拾　ゐゐもゐのゐをに社ゐ[　]人ゐゐ[　]ゐ社ゐ[　]ゐ[　]ゐ[　]

同十六　おのが住り国じ志賀で志れ申る哉さ〜田まの浦めーの月や

同十七　やしまびぬ志のくが篠まに名を[illegible]はろ〜そ[illegible]なの歌や一乗でかりに
こ物ろ八あ[illegible]くいた。ーと[illegible]ろ〜そ。やと蔵う。ゆーのを二つ〜ろみ
ろ〜ぐ[illegible]きし

○えや　はたはハエのめ〜ろもと

同十八　我が[illegible]ひ[illegible]のあぞ志乃ゆ〜〜くかろ〜くまそふ[illegible]ろ〜　えや

六る家　死時　乗川〜ろ川お月きぬ〜し せぐをとめハナ〜ろとのをかぐ[illegible]さ次　えや

はえやろいし古き鮮ろ。ち〜ろ伝日本紀千　倭建命の歌伊ゆ[illegible]まさや
ろ〜ろ。千年をとこ〜ろれ[illegible]ーり。ゼの重ち[illegible]ーり　出せり。又源氏物語[illegible]
文ろ〜ろ[illegible]ーり。ろ[illegible]を者地し難せろハ行ろ〜ぬ〜ろ。

○き一や

後十九　世中はう〜ぬりのなきや　人言ぬ[illegible]ろ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ

後ださ
れたて

夢うらぞうびてハおりゆたまさうにゝゆ人あまや又やさもしるこ
れわゝのあまやハ何とゝ形ふうふ欲島のやを作るにてゆとるとゝ作ふう
日じゆ何とやる茶ゝもえゆゝせの毛古風ふ出ると

お物ゝ
長家施

えゝゝり孫ゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

後拾一　春夏　さくら　山川　いそのかみ　や　おそき　山川　いそのかみをくぐるふるさとの

はやハりゝ　鶯ひのやうに　おそきゝ　衣をゝ　ゝ　ゝ　

[illegible]せあ[illegible]
[illegible]や　やゝあ[illegible]　[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

加

○をべてかをやゝ仰る鮮まて。やと[illegible]ひてよ[illegible]
[illegible]
[illegible]
十　みよゝせのよゝの儀ゝ[illegible]を[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

拾又 いつのまふ和紫しゐらんふ山ばらくきのふ [ろ] をのちゑ、こ[illegible]

日十七 世を世をむくそらくし [ろ] きく [illegible] おくふ山ハねそひそ入るかりそる

右の哥のかゝそ。ゆひハやの格よ同じくそ。やゝハ西りそ。かすゝを中ん[illegible]と譯して

ゆゑ也

拾十一 命をバあふふかふと [ろ] きくしかどわをやたゝそ[illegible]ぬるふせん

後拾十一 ゆふこふ [ろ] ありしいふるみくりる人々をゝ先ゆくまゐの波

日十九 みゆきと [ろ] よふハふらせて今ハふゝ[illegible]の橋ちゝ[illegible]

ふるゝのかゝ。ゆんのをゝるくハ上ゝ同じくそ。ゆゝをたゝしふ法ゝ

○切くかゝ 神のゝぢ先にかくかゝり

古十又 夕さゝれゝ人ゆきをゝちをゝひをぎゝん[illegible]

日十七 ゝがうへゝ高ぞかくゝる[illegible]の川 ゝゝるる私乃ゝいのをつく [ろ]

日十八 五中はむくゝよをやゝうかりゝん ゝがゝ少ゝむゝるのゝふゝる [ろ]

後十七 ゝがた先ふをゝにふハゝるくゝ雪ゆ人のふゆゝをゝくハまゝ [ろ]

拾十七 ふゆかゝとふやゝとゆる月ゆのゝ[illegible]ハなゝゝて人乃孫ねよゝれむ。 [ろ]

古又 秋の月ゝべさやふてゝゝせゝそゝ和紫の教をゝよゝ。 [ろ]

日 かゝゝる田ゝおゝるむゝちれかに出ねハよを今ゝさゝに行きゝそぬゝ。 [ろ]

万紫よハゝんゝ[illegible]ゝをゝいつる弟ゝ多ゝ[illegible]ゝこゝゝこゝハ

ゝしゝをおき八ゝ 塩みゝゝんゝをゝゝる八万紫のゝゝゝ

古 ゝ為ゆゆゝるハなゝゝ [ろ] 山ちゝ送ちゝを[illegible]まぬ人ゝゝかゝれで

日記 秋乃世ゆ美のゝゝゝ [ろ] をゝゝきは水出てまゝく世ゝゝゝん

後十 ゝがゝ神をゝふゝゝ赤ゆまゝ山 [ろ] 定より伝のゝてぬ日ハゝ

拾八 侍ゝ世ゆゝゝのゝひハをゝゝゝぶハあれゝゝゝゝ [ろ] やゝゝをの葉

廿四 [illegible]川流の音はきしぐしふまちかくと人のおそのゑゆるは

廿五 [illegible]新しぶふんしでうふべきをかくこのあがみくきゆふくと

又 [illegible]

廿六 きりぎすを秋のうるまにとるる[illegible]移のそゑざこりゆゆ

に [illegible]のやに流乃波のしゆりを松くぐを[illegible]人の袖乃秋きり

廿七 [illegible]ゆくやうり巻の春をうちる[illegible]まさきのかづらきの心

廿七 [illegible]ゆふ[illegible]に神ふこぐ[illegible]をけまれぬ

此うるどハ袖を下上[illegible]

又

廿八 ゆ[illegible]と[illegible]又[illegible]面[illegible]も[illegible]も[illegible]ぞ[illegible]ハ

此かも[illegible]を下へ[illegible]

廿四 月をあやまんんりの[illegible]むゝ[illegible]れゆくゝの未はゝを人

ゝとハ[illegible]ふゝを[illegible]

廿八 世賀 [illegible]ゆふぞと人乃[illegible]ハ[illegible]

かゝとよゝり

もべて後のそぢめにおきて切ゝ[illegible]加の上そぢゝ格の辞よりある定まりし。

又やの終ふいつれゝ切ゝやの上ハ切ゝ格の辞よりある定まりしごとやの

ゝかゝの格乃うハをゝ。二例をいたゞ切ゝやハ切りやうゝやゝいひ。

[illegible]かゝあるゝおきゝ[illegible]ハ切ゝ格の辞ゝ又切ゝやハ[illegible]やきゝ

[illegible]ゆやゝいひ。[illegible]かゝ[illegible]ゝいふいづゝの言ゝ[illegible]

格ゝ准へてさゝるべし。廿四の[illegible]やの終の切ゝやの係ふ多くいり。

後拾二 きうだやおきのかぜ山乃郭しむしぬけたすゝこゑ[ろ]と。

金八 なんぞそとおろんせるハ見ぬ出よ哀ゆゑいのち惜し人[ろ]と。

古一 みよし野ぬけ山べゝ鳴ぬけ[ろ]ゝ笠者[ろ]と。のゝぞなやまれる

同三 夜乃秋ぬけふを[ろ]と。とゝれバほとゝぎすなく一夢かわらぬものゝ

同六 浦ちかくぬりゝる舟はゝゝ[ろ]きぬけ赤乃まゝ[ろ]と。そゝみる

同古 むぼこぬけそゝつゝふとまどハゝん人をゝゝも哀[ろ]と。思ゝん

右の句ハ加そ望ゝるをとゝあそゝへ後できゝる

○加を主なる句

古三 うぶゝの夜ゝふゝゝてゝふゝゝぎゝゝ[ろ]ゝゝ[ろ]ゝゝ[ろ]ゝゝ

同十八 よの中を夢[ろ]ゝゝ[ろ]うゝゝゝゝ[ろ]ゝゝ[ろ]ゝゝ

後拾遺 ゝゝとゝうゝゝゝゝゝゝ[ろ]ゝゝ[ろ]ゝゝ[ろ]ゝゝ

拾七 はの山ぬけゝゝゝゝゝゝゝ[ろ]ゝゝ[ろ]ゝゝ[ろ]ゝゝ

同大 いきゝゝ[ろ]ゝゝ[ろ]ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

拾十七 ゝゝよをバゝゝ[ろ]ゝゝ[ろ]ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

同十八 れゝゝべきゝゝゝゝゝゝ[ろ]ゝゝ[ろ]ゝゝゝゝゝゝゝゝ

こゝゝゝハ二つゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

又二つゝ

古只 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

拾十七 ゝゝ乗の星[ろ]ゝゝゝゝ[ろ]ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

百十二 うゝゝゝ[ろ]妹ゝきゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

仏茅葉の句ハ中の加を切ゝゝ加そゝの後ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

古十三　えやこゝ、あやゆきあんあとゝ　ゆき　うつ　ゆ　孫て　ゆ　さめ　ゆ

新勅大　おりゝ　美　ゆ　うつ　ゆ　ゆ　なき　ゆ　ふるゆ　ん

けふハ二つゝ　二つまゝ

○かゝ　ゝのゝこの　加

後拾八　ほゝなゝゝバあてゝゝとるぎかゝゝを　ゆ　人乃　ほゝ

けかゝ　ほのゝふゝ　生て　下へゝ　かゝ

ゝけハみるゝゝ　かゝ

百十七　おいぬゝてゝなゝゝ　あ　身　せ　ゆ　きん　おいゝ　ハ　ふ　ゆ　ゆ

拾世　うゝよをはそむゝゝゝゝとそむゝ　きん　月　ゆ　ハ　ゆ

後十六　かゝてのゝやむべきの　ゆ　ちゝや　ゆ　ゆ　ゆ　代　ん

後拾十七　ゝゝ　ゝゝゝゝ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

新十四　ゝゝとゝバいきゝん　ゆ　とゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゆ

拾四　あの　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゆ　月　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

○かゝ　ゝ　ゝ

古二　ゝゝゝゝ

不定形下ノ加ハ五活ニアラズ曰ク

後二　主ゆくかたのこと　うそ　山ゆくこゝろ　ちらし　ゆくもむこうを

同右　まづかくしたしきはみるハうゑ　ゆくこゝに　うそ　をしきよりハ

十三　をちうつりゆくそもしきものはちるいまいくか　うそ　ちみぐさのをし

同十　うしさびや　あびをつぎ　おとこ　うそ　秋の　をしうをかくしとゞりハ

○かのをのかた

十三　いつふむ　まてる　日ハ　神　はちうつ　うそ　新　をかふまづあびうん

六月八　くもバ　まこと　ゆゞり　うそ　たゞ　人の　かち　生の　糸　より　乃下　高

十七　花ゞふうゞ　ちし　ゆき　をゞ　いくそゞ　ゆゞし　うそ　号

いうをうん　いをん　はは　中に　をゆ　うそ　よゆうに　をゆ　しこゞうん

をのかも　ふ　ゆ　いく　ゆゞ　ハをべて　をかっをし

をべくかとかをしとハ　年　日　をとをそ。在ハ　毋ひうう。紙ゞゞと後

世うハ別をとゆゞ　ゆく　ゆる　在ふ。ゆゞ　ゆく　かをのをとかのをとゆて

拳ゆとゞ。やとやをとの例のゞうう

○かゆのをのかた

十一　後みゞう糸ようけて　ちうう　歳　を　ゆふ　ぬをう　ちち　柳　う

同二　をゞむべきあとハをうう　に　をう　をく　ゆを　ちう　ひゞふ　ゆゞふん　う

同十二　紙　ゆゆ　ば　筆　に　をう　をう　ゆを　ちて　つを　花　をゞう　う

同十六　ゆを　をき　紙　今ハ　ちゞ　とゆ　ゞう　人　ゞを　とれつる　をゞ　う

同十七　うゞ　名　ゆゞ　ゞう　をう　ハいを　れゆを　をつ　をく　うを　よひ　う

同二　うつを　ゆう　ゆを　ゆう　橋　ゆを　くを　とを　をう　ちう　ゆを　う

同廿六　天のかぐやまよりなびくふもと人のかなたをゆく　うた

同廿九　うちつけをふさびしらとをうりみぢ紫もゆるき宿ハ冬かりの人を

同十七　ぬきみだるる人をかなしきものとしたまれくるとうた　紅のせどきに

金三　ひと人をまもるべの笠どれたちうしひもとに猿藤せよやう

秋四　ちらひら秋さをハ春ちぎりめやどるうた　月の紅ぬせどに

○かりも　ちるハをハ秋をうつる鶯ちでかしいふまし

古二　今をうた　咲ちるふんしちぢるはふ鶴の渡乃山ちるの花

拾十三乃十一　ひとり川乃山ちはる尾のちぐらをのちくしまとうた　紅ん

天のかぐやのかたハ神のまんまて上侍ぐ名。○時雨古今天のかぐやわびうた

ちんをのくしはるちくしの山の美はりみち歌。長ハやとかきうかりぐくも

古二　春がすくいろはるふるしてるハたちびくしの花はりをうた

同十三　おうしげ河をぞ春ぐ名くしらぬべと乗ふくちうをんえきん　うた

拾十二　ちやうを失を地おりふ人のくろうも　友はるをがくをにりもんん

同十三乃十一　秋の乗はる月　うた　天をを春がくをとバくもうをバくらを恋しき

はしをびハるかくかたも

長七　秋乃乗をうを　うた　春をイて海るしわが見ふ人のをくハてやせ

はくをとハトへでくやくにはるもどるし秋くしび。紫切くしびそれをきべてかの張び

ハやと日桜をふ。三の白ちりとうくハかの結びようびをせつでをきをハ高のをも

をぐうをくぐれをし。風雅ナふ人をくとりと紅せぬ春ちの秋のまの色月乃

詞。はかもうとハくで人くとしつふををそ。くとハ中とめ詠にかりれくりしがをしれを

の高はかくとかとし咲ちるちんをどのておをくをくしとはに中人どくしてをくをを

をう。をべて人くとかもをいふハ。はとハ二つおふやをあ海をて人くをくをうあををを

○かりはをのかたを

古十七　うさはらしよせらるる所のもぢくもくまくはりきゐ玉津嶋　うも

同二十　袁八変れきどうれまね掛れ第乃三山乃面ぢ化祢のきゐ　うも

代々集第二にいと多くもべてみの表六くもとつふてこハうして。みくもと
かとつつ。おきさまあみどにちやうもとまを万葉第六

○ゑんかうも

古十九　山伸はおかそのの山乃者りじふ人のゑうべくもどらひ　ゑうも

万葉第三　ふちばる右下野はたぐらくれつくもの山をこひぢつ　ゑうも

代々集古の表ものとニつ三ニ者又古十帝の文ゆ今をうんざめうと　ゑうも

○かふ

古七　はくらく風ちるをかひらりをおてくはんとつふうそまぐふ　くふ

同十六　ちくはうぢ面と今くうん　うつりまうばうてうる　くふ

拾二　山ぢやとにちる人をもぐ邪　はうぎれをきぬときくばつぎふる　くふ

古二十　まれむくはあうぐの山乃山人や人もろる　うふ　ふうつくせよ

代々ふのかを後撰集に侍てよあぐもとを得べき歌さ万葉りがかなぐよ
ふいてるかり七の表古風の歌りかせり

○かや

玉十　とかるべきそれ　や　ふとバかきうとわぐ風ふりハはをぬよのそう

小式部集　なのりせでちぐどもりとどバ郭ふまうりてこうもと　うや　えん

○新古歌十八古歌　嘆花のくるるかや。
新撰和歌　秋のくをかつゆをバ花もみるちりかるや。神ふもしん
山二者ハくるかやを屋せこうそかや。
香やうり詩くりハうぐ

拾七　ふとうや　くきのをかどハおりもしてはやくひけんをを志れ

源氏　ふとうや　くふのりぐくよりえつおぢやくとも吹ふるうる
若菜

ふとゝやとして神代式外に載たる八ぐさわもを

○何等は下ふおくか　ゝを日　次の何の訓り出せり

○ゲふは上のがゲも　云の毫かゝは訓より出せを

○ちその結びのちうか　五の毫ちその訓に和をを

○ちうで半かば　上の毫むの訓ふ出せを

○ちかど　ふは毫との訓ふ出せり

何

○なふ　なぐ　なぞ　ふは　ゐゲ　いふ　いぐ　いぞ　いづ　いづ

○ハ〳〵　伴の訓皆てふをそれ結びの語用ゐきふ一つふ合せて何の訓とを。ちうと此書に何等とつゆを。伴の解ごとまをべ　訓と続の頭ふ何と挙ゐて一つふ[illegible]ちうとちうちうを[illegible]

ゐる毫しさて毫の結びそ。いづをもはじく。中の訓の伝く訓解ゐそ。一の毫ち出せる三物語ふ訓めし。その語ふ八。右の解方の用。いづをにまれ訓ちうを出をを。そをふ准へゝ。此訓の用ある解をを。みな用格乃結びと知べし。

○何の下ふおくかかを

何等の解をおきて。その下の結びとの間ふ。かゐ[illegible]ぐ訓をもむて常に[illegible]おゐ。

[illegible]ふかゝうん。ゐをちうゐます。いゝちきるかんなどのめし。又美ふをふうを[illegible]

なぐをゐん。いつゝを言訓ゐる時あるなどのめゝ。かを[illegible]おりをとをて此かを。右の

おゐゝ何等訓下にやどゝてづきてをおき。又訓なぐゝてゝもおりをを。ふを[illegible]

しとかの人のうらうん□ふげまたをかあれまんあどのめし。かをもはじ。

藤十三　いれまでもうねる人のうちの楽うちうの秋乃姿をまうらん

河　たがうえをもまがの作を出る乃浦をやどう秋をつうハこし

加茂に河をおろく句をへどそくとれたり。うとどその方をにちうびして。

ちくべき和を必さぶまれり。ふまうを世ていづこおもくおくるあハ河ぶ。

さうれでおき和のようしかくぬあたへおもこまかこうと。たふおを。

秋二　はりおを出れたのべうてへメ秋うちぎりうおうん家秋立ぶる

秋新十八　あうをもあどへ又とう彩のあるかうん出うがうまての月ハいてきを

猿蓑　かくそびたはりの合はあのいくうりへちぎりうひちぶ住秋表

玉　又　いく勢にゆ先う かどろくはうつきの麻をの後のかのぞうくをき

百十二　神無月あはるるおうびふりにせバうが星のるふやどうかくまし

元浦集　等代乃春はるる日をり出てえんはをいくあたむうかうくく

保氏推本　君ぬうみうぎはのふぜをとうふがしとめにつをうをやうん祝ふはして

伴のうぢものかすぐハ生うるぶ〈の事ぶ西ふおくべきことうるを。そこよ、おきぐ

きあふせんうるおくあをうへてトにおるあをそ。いづこも少よかぶ〈後年は例を

まものべきにあるぶぶ○後撰七うぐうくに紅うとをんかうあしき立西の山乃

紅葉をうにをぶかハしで紅うといる鏡をも。上のるぐふかハかうくねバ別すし

又　あのふしうあふしうをもうふしうく□□□□□□□□□□□□□□□

うくしいうるハ。しとをもやをめうる鏡ふてしうであふうるうをいつ年いあふはじ

近き世は人を元のかくに何ちの下に□おくかりぐを湯りてやういふうくた

わし。あふをしとう人のかくんといへきをうふを。しとやく人のかうう

んといひ。ぬがまをとうを和ハさのまんといへきをたがまをくをや。和をう

きのまんとやうにとむをり。をべてかゝ侍るやとおくハ若ゑびてとし又あ
らぬこゝの但ハ詠ふ汁語り来し。あゝかゝいつべきまゝあゝやゝいひ。いうあう
いふふうゝとふべきを。うあうふゆゑ
ゝゝたいゝ歌若ゑびてとし。古人の文ハひ語りけゝゝりきを。今の若ハ文よ
くかゝゝゝ人もまゝゝ汁板を鞠へ初ゝるハあゝ。をべて何ゝの下よハやゝい
ふゝゝう、若かゝりゝんたべ。後撰一条ふいふぞ。梅やふゝりゝん。こゝまハいふ
ゝゝゝゝ人のまゝゝやゝゝゝ月のゝゝふゝゝん。こゝまハふゝまゝゝいへきバ。ゝれのゝ
のひゝを下へ及ぶぞ。伊氏ゝゝ花ゝきゝゝれてのどゝきゝゝゝゝゝ人をいふ。ゝのゝゝやゝこれ
ゝいゝゝて切ゝバやゝゝゝ動ゝ。こゝまゝゝのゝゝゝをゝゝゝゝゝ

金丸　いの　だう神もうれしと　みうさ山二葉は生乃ちよはうれを

日八　ふふとてふれを言語うり　雪もど　いづう　はちくふらるなれさを

廻八　いくうう清しと人をみ　□　なせのくく色くくるるかうん

芳四　たき　をうもきれ　ちはは山乃女郎も秋と葉生る人ぞうるし

日　大うくは秋の初ぞは春きくバまる　たが　独ふはうの所の月

日六　月ぞ見む　たき　うハちくに　□　きの雲や　吹上のふる　□　るうるなくし

日十　いづく　ふうとよひを家を　□　かりてうるとふもゆふ雪は雪のはうしふ

日十九　なをくくて又くハるぞうはは　□　不知　ぞうと　ぞく　きうく川の花は下法

日十八　いうふ　□　してゆきまでよふハあり所のつきせぬ所をいとふこうろを

に二十　おうふきくくるぞうと　いつう　□　いきは松まうくん所をんばくくに

万九　御のこうへ乃に紅の山ゆ秋はべりきあき海るを　たま　□　ぶこ雪

○金葉三　いうくへのうふをのきくゆひをてき津乃文りり月はうるれるこれハ

雑後をやぞなふをふ辞よひうりりの様と

○切うく何　□　後の見ぢえにあり

後十三　れうふうかたとはを　いうふ　□　をいぐくしあ。後こうに抱と思ふぐこもぐ郎

後十八　いきしうう志はうう。　いうふ　□　おりりしぐ。雪より外ふるむうしげる

源氏　竹うの　いでや　あぞ　□　敷うくぬ雪ふうるハぬを人ふまぎ抱ひちりを

又下に加かをを係て切るもけり

後十二　よのくくは抱くのうう抱まぐこねバ　ちふ　□　り　□　け度をぬべき抱を

拾十六　ゆうくるうり志あぞ　あふ　□　ちとけうくバあきいきをうひる抱ゆふ雪ハ

○ちのかふいづくくとひて切るおりく。そきハ下ふるいづくの様り別ふ

出せる。又や何と上よやぐわるハ。□の雪やの様くおせり。

○伊勢物語

後十八　年をへて　いふ　や　いふ　風の音に　夢おもいまはりのやかすき

後十八　ゆめうつゝいひくのそこく　ハ　いふ　や　いふ　ちゝんとらゝん

文太　後五　此歌をも後をも　いふ　いふ　せんりえんりぐりもいとぐ社つ

うちふしぐにまゝるうり

まし

後十八　ふねこぐ　つかとハぬ　ひとゝ　たき　を　たき　とう　歌ハ　ちゝん

後十　おりひしに人もあるる　中城　いつ　を　いつ　ゝゝゝゝゝん

千三　ことゞ　ぐの　音　ちぐ　ふく　ゆを　たゞ　里　ゝと　たき　ぐひゝん

同　たゞ　ゝゝ　いふ　うてバ　ゝかゝゝゝ　ちゝび　ハな　ゝ　ゝゝゝ

新八　いつ　ゝぐき　いつ　ふべき　ふしかとバ　後のよ　ゝで　人ゝゝぐゝん

日十六　いふ　ゝて　いふ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

後五　ゝ　ふ　ぐゝを　いふ　ふゝとゝ　ゝれぐゝたゝ　ゝかゝゝ　ゝ　秋乃ゆぐき

別四　ゝ　ゝ　ゝ人を　ひゝて　いふ　ゝゝん　いづき　の日ふゝよゝふゝん

文お習へてゝゝゝとゝ

後十　ゝゝゝ　ゝ　ゝ　いづゝ　ゝ　いづき　のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

後九　ゝゝゝゝ　ゝ　いづき　ゝゝゝ　いゝぐ　ゝゝゝゝゝゝゝ

後九　へ　いゝ　ぐゝり　ゝを　ゝゝぎて　歌ゝゝん　いく　ゝゝゝゝゝゝゝゝ

○春田社ゝ会ゝ　いく　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○をとこうら 山桜 詠びよかりけり

古二 ぬきつばをこひてをりつる手おれ花ハ いく[illegible]とかりしと思へば

同十三 うぐひすやこ乃うつ[illegible]はさぐるなる美ホ いくつ[illegible]をまさぐりみる

同十八 いくよをかつゝ[illegible]をうぐるかりこゝとおもひみぐ[illegible]

屋一 まれホるる人し[illegible]ばこの世ちとゝなるも ちふ[illegible]とゝひなかりみる

同云 いつ[illegible]をを月又ぬ秋きなれりのを分てこゝひのをづりしき式

屋二 いつく[illegible]ホをちきハをゝめど紅屋戸のやまを松ゝたまふんせ

屋四 ちびし[illegible]さふ[illegible]ど沈を出てあゝしきハ いづく[illegible]とゝ同じ秋乃夕暮

同八 たま[illegible]がゝとゝ見ゝ雪をちゝ[illegible]ぬよの中にまれ[illegible]ぬ[illegible]ゝんとをゝん

同十六 月又まば たま[illegible]をんぞなぐさまぬ横雲山乃ぬりをゝ[illegible]ねど

同 いつ[illegible]ゝりをゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible] 土 たくゝ山乃まつの木ぬけ葉のごふてきの いつ [illegible]べゝとアしぬ[illegible]ゝる

[illegible] 七 [illegible]がた[illegible]ゝ[illegible]ゝき人をばおきまゝ[illegible]ゝ ふゝ のつゝなき[illegible]ゝゝや[illegible]ん

[illegible] 一 おぼつのきぬ[illegible]ゝて乃[illegible]ゝ たが 里[illegible]ゝ 梅の[illegible]ゝ

[illegible] 十 人しまびゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ ふゝ のゝひゝゝ 女ねべきゝ[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

古十六　いつひろびばこそまされみるせ川　[ふ]ふかうて　ふひそめきん

屏九　わふしくれかくこそぞくんはちりをぐしみけをぞうり　[ふ]ふかるきん

こゝハふを帰り又笠をたくへんをいやこびのふを見しとハ別し

○ちのふせんふ

古十八　いつふまぞけかくこんまこゝ[ふ]せんふえてもんのちぐさあうくに

屏十六　[ふ]せんふへくこのみる先をおりひきんおきろ　みを春をかづくこゝにして

こゝとハせんふゝくいゝすを作ゝり。そ古ゝ春こゝハ切と。屏横ゝくハ切とぞ。ひ

ぶいさくるふくし。

○ちのふせん

拾十一　ちひちゝん屏七[ふ]せんひまる日ゝ春ふを人ぞこえまくゝ

ゝとハせんとゝひてゝゝりとハゝ

○ちのふ〜ふ

清新十一　ちゝぞ川せぎりにむちぶろの陸乃ゝのちゝ[ふ]しに見ひそめきん

天ゝ春　わゝまぢけ者ゝゝりけをいつふ坂の実城[ふ]ふいそぎちゝんきん

○ちのふ〜

[ふ]

屏八　[ふ]ふ　は屏横七

一葉いろそえゝへ〜ふりちゝん花りてちやちゝもこゝまくふ

風二　ふふ〜たづひふハちでけちゝ[ふ]ふ　ちゝをいつぐゝちゝん

○ちのふと

[ふ]

新屏二　[ふ]ふ　ちかくいつぐゝちゝ乃春ゝもんゝりぬゝ　れりひそめきん

新撰古十　屏横十六　ゆきゝとて一枝ぐゝかゝ　れが根ゝ　[ふ]ふ　ゝ巻ゝちゝちゝん

○ちのふとて

美濃おしてとうれきあるりあるを　□　そ人ほつかとえつ
伊勢　をうれ〜やまだよしのうちをくきふ　□　そて寿のうをいそぐぞ

○うふを

新古　うれ人乃用を　□　そのゆうをぞとおりひをうもうちけぐをつ
　　仏そハをづし。拾三の巻ぞの新いくそ　□　いくそのゆうくうくいつり
　　○多密ふハうふをとうくいてうしきし。ふうふをれぞをありぐゆうをとを筑波ふをて安

○一つの板

金又　も浦乃まんぞ詩教を　□　ちうぞ。ゆきをぞをうあうれ代りを
　　筑波尤公宝号　を代の教をうをべを　□　ケをとと。多あ詩漢の玉砂をうを
　　太れ　□　でかりをふく音ひをぞ。とよをつよ詩をえを和ふとをうをばりし
　　伊勢　あひをてのひををの玉をうをうをぞばをちを月日も　□　ちうをぬ

○うふそて　三の巻ぞの新ふ出せり

○うふうをや　仏巻やの新ふ出をを

○なふを　かや　清巻かの新ふおをを

○うふうをしをうちしる板　二の巻変格詩新を出せを

太のか　ふをうをうをを

○下にかをを　□　なぐを

○下にかをを　□　なぐを　□　□　□

後拾十 [あぞ]て加くまぎらくうん加くだりのどうふを考る月もいつる世ふ

千三 あぞてうくおりひとめきん部ろ書ぢみやうの法乃古ろうは

いせ物 [あぞ]てかくいつのあぞかくろふをりたきんありりくさぞくもをぐ〳〵あを

とまりうてを侍りり

又てかくとしいてるハ

後拾二 みちよへくなりけるあを[あぞ]て久はりくろもくろづをそめ侍

○あぞや 仕まをやの紙た出せ

右の歌おくゆるくなし

●[　]あぞ

○下ふかゆ[　]をかく例あり

○[　]あぞを

古十 かくるを火りいつくぬ思ひの[あぞ]をかくく後の河ふくそりやん

金七 [あぞ]をかくくこひぢふたちてあやを光あまり考くもふ月あくくん

井蛙抜一 長さうの院 みな人乃家ぬ ろくくく花ぢかりあそ

あぞくもハ長ぢし

○[　]あぞや 此まをやの紙り出せを

○[　]なぞく ふの書とのの紙ふ出せり

右乃歌くあるおくゆ

●[　]れ[　]あぞ

○一つの指

古百　みちすがらのきのぶりぶりぶるぶる　たま　ゆるふみぐるんしぶるぶるぶるぶる。

後四　まれ人を　たま　ぶるぶるぶるぶるに新　ぶかりひのみ　にぶるぶうかるん。

拾十一　きのぶ弓を　たま　ゆるぶるぶるぬぬれで今ハぶふは弓ぶへざてん。

古四　たが　秋ぶ一ぶるぬぬのゆるぶ女弓　ゆるぶぶぶ

○孫ごふそのいふ〜て　後代なるあふそぞ〜てしこく申さし

後上　知〜り力〜ゝ号ふを〜〜〜　いかふ〜て　れをゞ心ゝ人をゝ〜へん

同十三　いふ〜て　かく〜号ふて〜ふ〜ゝ〜ゝ〜ぼて〜ゝ〜ぞふく　ぼて〜ゝ〜ぞ　ゝふかゝ〜ゝん

同十四　いふ〜て　ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝん　何そゝ〜ぎす　ながき　ゝ下　れをきばうひゝ〜

　　物　ゝ　ゝ〜ゝ〜ゝ　ゝ　ゝ〜ゝ〜ゝふゝ〜下のいそぞの　ゝ　ゝ　出申り

○いふをきや　ゝ　ゝ　ゝ

日十九 いりぞ 又かをかさぎり山ゝ分をきして寒乃き張ふそ りんとぞ出

拔六 きつゝうりはゝ いりで みやこへ告やうんりふ白い 乃冥きちらぬわく

日十一 急しいへで日ゝ〻ふふこそ思ふゝ見 いりぞ 赤男を人ふちうせん

日十二 翼をゝぶふ いりで かゝくふふ天てかをなをなてゆくよのあくさめふせん

日十七 いりぞ あかはゝゝろはを思をふちゝ りんあゝよりてうあ紙とハみゝし

拔十七 八九 みるゝ人の いりで とかりふよりりよりたを見しとををハかるゝ乃ふ式

又かを添てつるまよう

拔十一 いりで とかりふるゝはあるゝきハちをあくさへぞうわりりる

又をを赤ゝゝ八

夫木 いりで もしゝ思ふんゝをはりかふは井ゝりを捨ぞ涼さまゝゝわる

拔十六 又ニつまゝのゝゝ八

いりで いりぞ ちるゝんをなゝゝさめて張乃垂まぞ張袖を置ちゝ

右の外おとるゝとをし

しづま

○いづゝ いづをいづちいづゝ

○いづまゝまゝれかをゝゝゝちむる梅 二月十四夫木の抄小野宮

右乃外おとるゝとをし

へづゝ

○まべ〳〵いづくハ皆切〳〵格子下へ出す掛をし　結びきりぬくふ結ぶ
古十七　むぐもをれ小ぐるや　いづくこよろぎの機乃浪をおきふ出ふ乃ふと
後廿　姫ゐ法せに見る。いづくとまちをぐいつをの元れ愛しくいをほし
いせ愛　いかゝへ乃ゐをひを。いづくはちゝをしこをる加ゝをを嬢ふ乃ゐ
古十八　よの中ゝ　いづくを身の之てをゝ　たゝを花ゐやいゐんあるゐゐやいゐん
新十又　いをづくはちゝをねよひもをゝりゐを　いづくをのふゐしゐぞゐふ
撰衣　きの見ゐゝ。いづくゐをれをの花やこれ。人ゐの色形ゐ出ふを有りれ

又下へ元を添てもとり

古十九　むつごゐをまぐつきをくふ的ぬ見を　いづくを　れつをゝ　ちふよハ
後十　とゐをかゝをいをの方れ巣のゐしぬゐゐ　いづくを　ゐのかゝをゐゐハ

全八　ゐふをてふゐをを為ゐきをゆをど　いづくを　ゐゝにゐ方の里
　　ゐの外ゐゝ形ゐゐゐれし

●いつ

古　○いつかこをハいつかゝいふしをを先ゐて。ハやをゐ鶯を
　　をばゐゝハををゐし。ぬをゐをを後世をハ。いつゝゐゐといへど別ふ一つのゐ花ゐゐゐれを
後一　れををぬをゐをもつをゐゐゐ　いつゝゐ　をゐゐをやもはゐゐん
撰十九　いつゝゐをはをゝまれをまゐゐをん　ををゐをゐ人乃をゐの教ゐん
古口　ゐふをは今ゐん事れをきの心をぞ　いつゝゐ　とのをまゐ為ゐべき
後八　いつゝゐと。山のはゐゝをもゐゐ事れをゐをまゐゐん

同九　いつしろ。わがまゝ山のあなたハ天てんかのある信濃ゝ山なるゝ神ゝ仏

拾十二　いつしろ。とくまつまゝ方丈をうるゝてをうれうり弘純

同十　いつしろ。と云まとゝ思ひ〳〵若葉をゞ法のゝと先ゞぞ〳〵やをつゝる

牛のあゆゞとのいつしろハ。ゆ〳〵しく〳〵と結ゝ

まゝ

拾九　いつしろ。とうきてゝゝれバゝゝゝる拾あるゝふ所ゝのゝきゝる

六帖　いつしろ。もゝゝやをゝしつゝ日ゝ川ゝゝてゝまくたまとうづかん

こまゝてハ結ゝゝとゝハうゝぞゝゝゝゝ結ゝゝ。おきのゝハいつゝゝ

まゝてあをゝてゝゝれバゝ。六帖のハ。ゝの日の上へうつゝて結べゝ。いつゝゝ

と結ゝとうり

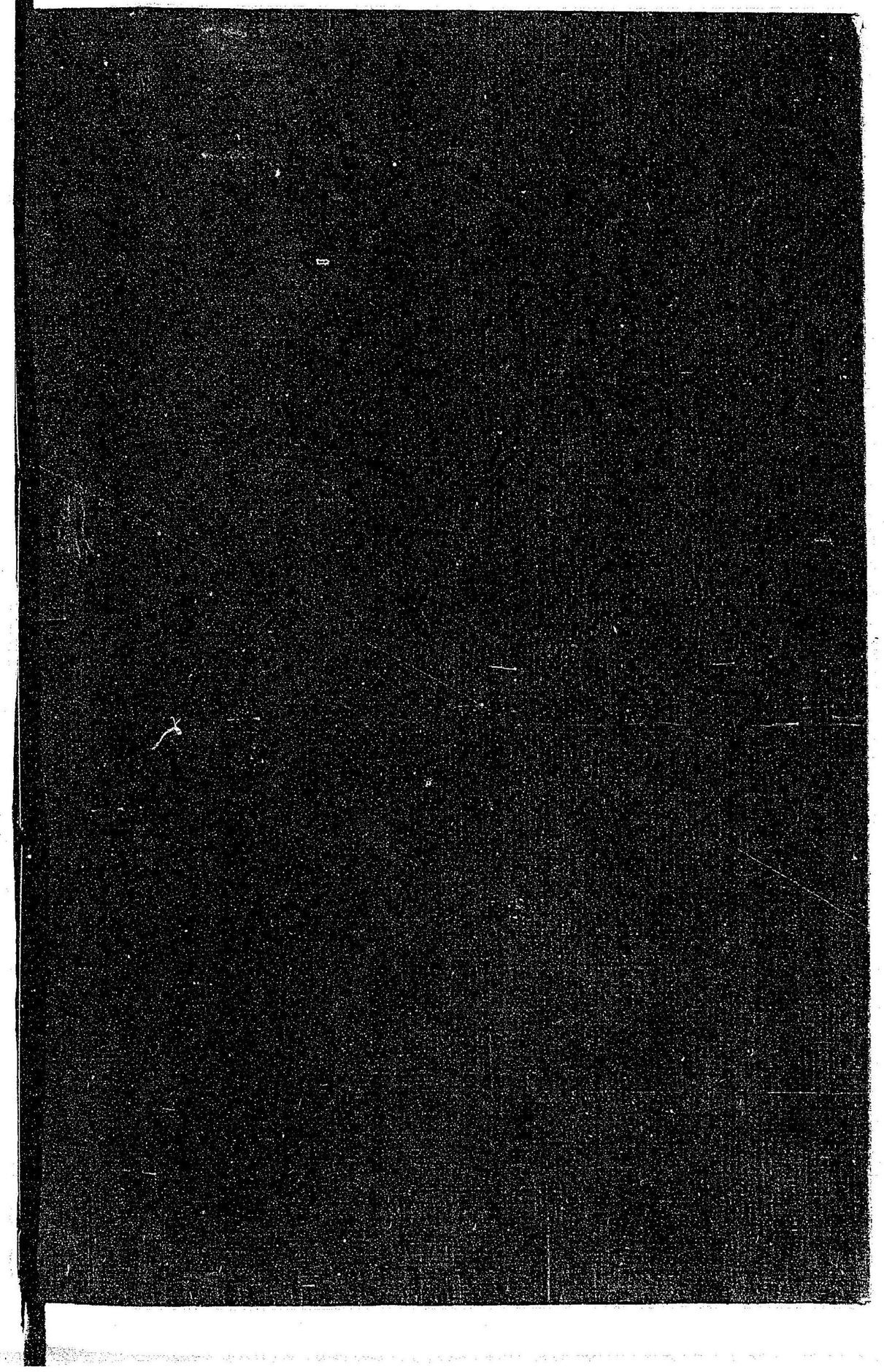
まゝ

金一　いつしろ。と思ひ立れかゝゝるゝ天の戸ゝりや　ゝハゝゝん

同　いつしろ。と書結ゝゝにゝゝ川　拾ゝ結のゝゝ結ゝゝゝ

千十一　たりゝより　いつしろ　ゝゝたゝ日ゝ武ゝゝゝゝゝゝゝのゝゝるべゝゝ

同十三　ゝゝをにゝてゝゝゝゝ人ゝ　いつしろ　と。神ゝゝづゝ祝ゝゝるべきかれ

拾八　粧ゝゝゝゝゝゝゝ

いひて。ゝで ききて久しゝきてゝゝ此ゝゝゝ